

「タムール・シェルパ」との出会い —東部ネパール、タムール川流域の調査より—

今井一郎
弘前大学人文学部

本稿は、東部ネパール、タムール川上流域の山村グンサに居住し自ら「シェルパ」民族を名乗る人々に関する現地調査の速報である。筆者はタムール川支流の最奥の村グンサに滞在し、住民の生活形態の概要とクラン名を直接観察と聞き取り調査によって記載した。彼らはジャガイモ、ソバ、カブなどを栽培する他にヤク、高地種のウシ、両種の雑種およびヤギ・ヒツジといった家畜類を飼養している。また、農耕、牧畜活動に加えてチベットとの交易に従事し、近年はチベット産・カーベットの製作・販売が盛んである。トレッキング産業との関わりが薄い点はソル・クンプのシェルパと対照的である。住民はネパールへの移入路、クラン名が他地域のシェルパとは大きく異なる。筆者はタムール川上流域の住民を「タムール・シェルパ」と仮称し、今後ヒマラヤ高地民族の民族文化、生活全般に関する歴史・文化的さらに医学的側面からの総合的な調査研究を提案する。

1 はじめに

「ネパールにはシェルパと名乗る民族がいくつもあります。ソル、クンプ、ロールワリン、ヘランブーそしてこれから私たちが行こうとするグンサもそうです。今はお互いのつながりはありませんが、皆チベットから来たのです。」

「え、グンサがシェルパの村なの？」

ダーランの宿で一緒に朝食を取りながら、今回私の旅に同行してくれたガイドのK君が口にした話は、それまでに読んだ文献から得た知識とはいささか異なるものだった。

「オランチュン・ゴーラやグンサにはチベタンとかボテアと呼ばれる人が住んでいるはずでしょう？ハイメンドルフがそう書いているよ。」

「チベタンでもネパール国内の山に住んでいる人たちは皆シェルパなのです。シェルパ族のテンジン・ノルゲイがエベレストに登って以来そうなったのです。」

ちなみにK君はシェルパではない。シェルパの多いソル地域に家があるが民族名はタマンである。彼はシェルパの本拠地とされるソル・クンプ地域に住みながら比較的客観的な口振りでシェルパについて語る事が出来るのかもしれない。ま

た私には、ネパール政府が人々に国民意識を育てるため建て前上そういうことにする風潮があるかもしれない、とも感じられた。外国人のトレッカーなどが訪れたときに、ネパール高地の住民たちは、世界的によく知れわたった「シェルパ」という民族名を便宜的に名乗ることに、あまり抵抗を感じないのかも知れない。しかし、シェルパ族はあくまでもソル、クンプ地方に故郷を持つ人々の集団のはずだ、という意識が私の頭から離れなかった。それ以外の地域の住民がシェルパだと称していてもそれは対外的なものにすぎないのではあるまいか？

それから9日間かけてカンチェンジュンガ山塊の西麓グンサ村に着くまでの間と村での滞在中、私はK君が行ったとおりの現状を終始目の当たりにした。タムール川とその支流グンサ・コーラを遡りグンサ村を往復する約1カ月間の旅行で、この水系の上流部には住民のほとんどが「シェルパ族」を名乗る集落がいくつか存在することがわかったのである(図1、2参照)。

私は1995年11月2日から12月4日までトレッキングを行ない、東部ネパール、タムール川上流に位置する集落を対象に、住民の社会組織、生業活動

と外部社会との関わりなどについて調べてみた。本稿では、現地で得られた資料、情報の一部とそれにまつわる調査課題を記し、今後の詳細な調査研究のためのメルクマールにしたい。

2 グンサ村の現状

私がグンサ村に滞在したのは11月12日から21日までの10日間に過ぎなかった。滞在期間が短い上、ちょうどグンサ・コーラ源頭部のカンチェンジュンガ山ベースキャンプ、パンペマ付近で起きたトレッカーの雪崩遭難事故による混乱と重なり、調査は集中性を欠くものにならざるを得なかった。しかし、短期間の滞在ながら多くの興味深い情報が得られた。以下のパラグラフでは、グンサ住民

の生活を簡潔に述べ、次に私が調査を通じて最も強く印象づけられたタムール川流域住民の民族性について記す。

1) 調査方法と内容

私はバサンプールからグンサに至る行程の各所で住民生活に関する情報の収集に努めたが、中でもグンサ・コーラ最奥の常住村であるグンサで住民からより多くの聞き取りを行なった。

グンサでは留守宅3戸を除く全戸（31戸）を訪問し、家族構成と両親の出生地、夫と妻のタール（クラン）名および生業内容について人々から話をうかがった。聞き取りの結果はまだ十分に吟味できていないが、本稿ではとりあえず表1、2に

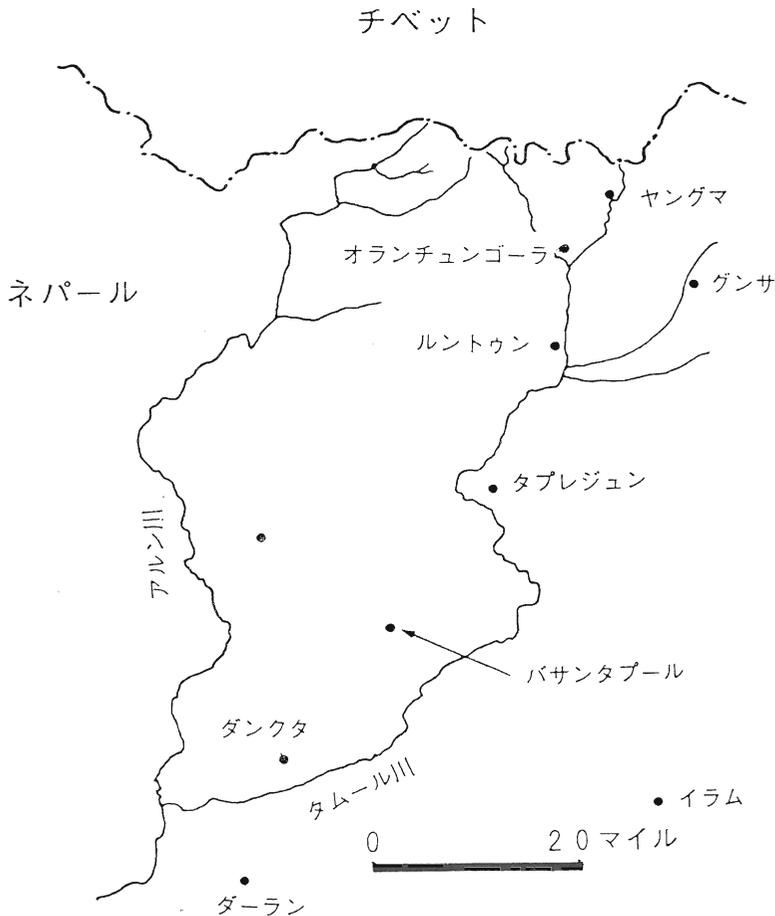


図1 タムール川流域

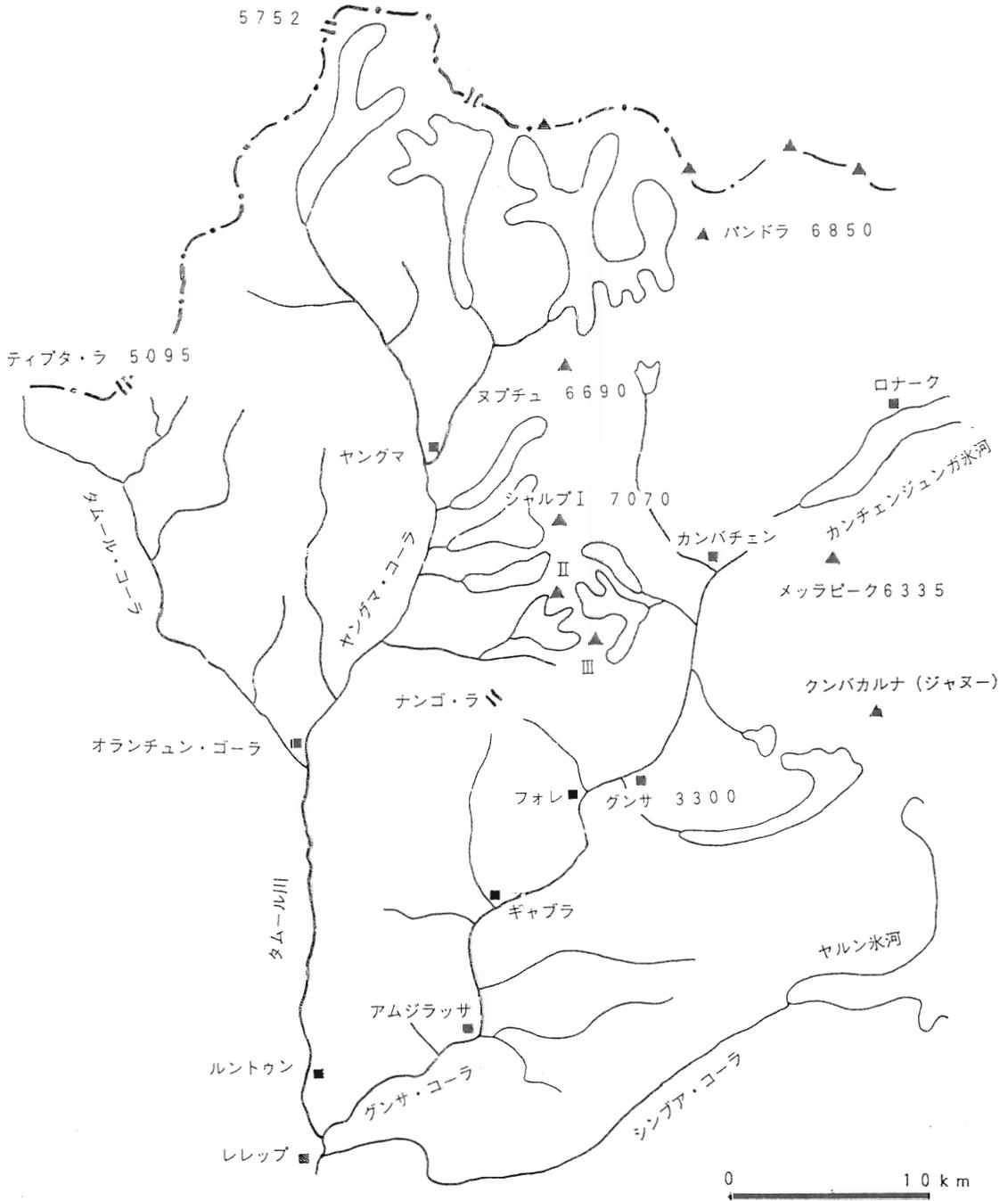


図2 タムール川上流域

表1 グンサの各家庭における夫婦の出生地とthar（クラン）名

家庭	夫婦の出生地	thar 名	備 考
1	夫：グンサ 妻：グンサ	chorzomba balbao	父はオランチュン・ゴーラ、祖父はチベット
2	夫：グンサ 妻：不明	chorzomba チベット人	
3	夫：グンサ 妻：グンサ	balbao chorzomba	父、祖父ともにグンサ
4	夫：グンサ 妻：グンサ	不明 不明	父、祖父ともにグンサ
5	夫：グンサ 妻：グンサ	balbao 不明	
6	夫：グンサ 妻：不明	不明 不明	
7	夫：死亡 妻：グンサ	不明 不明	
8	夫：死亡 妻：不明	不明 不明	
9	夫：グンサ 妻：グンサ	不明 不明	父はグンサ、祖父はチベット
10	夫：不明 妻：不明	chamba balbao	
11	夫：グンサ 妻：グンサ	chamba nawa	
12	夫：グンサ 妻：グンサ	tsogodejumba chamba	父、祖父ともにグンサ
13	夫：不明 妻：不明	tsotsangenji nawa	
14	夫：グンサ 妻：グンサ	chorzomba kamdakshala	父がオランチュン。ゴーラ生まれ
15	夫：グンサ 妻：オランチュン・ゴーラ	tsogodejumba 不明	12の息子
16	夫：オランチュン・ゴーラ 妻：グンサ	chorzomba kilpo	14の母
17	夫：グンサ 妻：グンサ	thaktokpa phukuta	
18	夫：グンサ 妻：チベット	balbao なし	
19	夫：チベット 妻：グンサ	balbao kamdhakshala	
	夫：グンサ 妻：グンサ	balbao nawa	息子夫婦
20	夫：不明（死亡） 妻：グンサ	chamba salaka	
	夫：不明（死亡） 妻：グンサ	pankalma chamba	20の娘（寡婦）
21	夫：グンサ 妻：グンサ	nawa nawakinakpa	父はグンサ 父はグンサ
22	夫：グンサ 妻：不明	minyakpa (民族名: リン)	父、祖父ともにグンサ
23	夫：グンサ 妻：不明	nawakinakpa nawa	

表1つづき

24	夫：グンサ 妻：グンサ	balbao nawa	父、祖父ともにグンサ、18の父
25	夫：グンサ 妻：グンサ	minyakpa chorzomba	父、祖父ともにグンサ 14の娘
26	夫：グンサ 妻：カベリ・コーラ	balbao bujunga	父、祖父ともにグンサ
27	夫：グンサ 妻：フォレ	balbao チベット人	父、祖父ともにグンサ
28	夫：グンサ 妻：グンサ	balbao チベット人	父、祖父ともにグンサ
29	夫：グンサ 妻：タクラム（7ル川上流）	balbao 不明	父、祖父ともにグンサ、27の息子
30	夫：グンサ 妻：グンサ	kamtaksheru nawa	父、祖父ともにグンサ
31	夫：グンサ 妻：ヤンボディン	lama pujunga	父、祖父ともにグンサ

示しておく。なお、住民からの聞き取りに際しては前述のガイドK君と彼の従兄にあたるP君の助力を得た。

2) 生活の概要

グンサ村の標高は約3,300mでグンサ・コーラ左岸の斜面上に位置する。30数戸からなり、集落の人口は約150人である。(写真1参照)他に小学校とポリスチェックポストがある。また、右岸にゴンパがあるが常住のラマ僧はいない。近代医学による診療施設はなく、伝統的なチベット医もない。人々は、治療を受けるためにタブレジュンの診療所からさらに遠くの都市まで行かねばならない、という。

タムール川上流域の民族に関しては、オランチュン・ゴースが中心的集落であり、その近辺にある集落(ヤングマ、ルントウン、レレップ、グンサなど)の住民はすべてオランチュン・ゴースの民族として記されている。言語はチベット方言が用いられており、ラサで使われるチベット語との語彙類似度 (lexical similarity) は71%、ソル、クンプのシェルバ語は55%である (Ethnologue Databaseによる)。約200年前にチベットからこの地域に移住して来た、という伝承を持つが、正確な年代は不明である (Bista, 1967)。グンサでの聞き取りによれば、この村はオランチュン・ゴースから数軒が移入してきて始まった。約50年前までには20数戸に増えており、その後も次第に数を増

やして30戸を越えた、という。フューラー・ハイメンドルフラがタムール川流域を訪れたのは1957年頃で、オランチュン・ゴースはチベットとネパール低地を結ぶ交易活動に特化していたが、グンサなどそれ以外の集落では農耕と牧畜に依存する割合が高かった、という (Fürer-Haimendorf, 1975)。

グンサでの聞き取りによれば、人々の生業活動は従来報告されてきたシェルバやヒマラヤ高地民と大差ない。すなわち農耕(ジャガイモ、オオムギ、ソバ、カブなどの栽培)、牧畜(ヤク、高地種のウシ、その両種の一代雑種、ヒツジ、ヤギなどの飼養)および主としてヤングマを経由するチベットとの交易活動である。これらの活動に関する年間のタイム・スケジュールなど生業の詳しい記載は別稿に譲りたい。

農耕、牧畜活動以外に、この村ではチベットから手に入れた羊毛を原料にしてチベット風の模様を織りこんだカーベットの製作が盛んである(写真2参照)。表2に記したように、私が聞き取りに訪れた31戸のうち22戸でカーベットの製作を行っていた。製作には主として若い女性が従事する。幅が約1m、長さ2mくらいの大きさの製品が多い。1カ月に2~3枚織り上げ、自家用にする他はタブレジュンまで運んで売却する、という。最近村を通りかかる登山者やトレッカーに売ることが多くなってきた。グンサから約200m低い地点にフォレという集落があり、グンサ住民が冬

期間（12月頃から数カ月間）過ごす所だが、現在そこにはチベットからの移住者（難民）が暮らす集落も形成されており、チベタン・カーペットの製作が盛んである。グンサの人たちが現金収入源としてカーペット製作を始めたのは、フォレのチベット難民の影響が大きいのではないだろうか。

次に、グンサの人びとが行なうチベットでの交易活動についても触れておこう。私が確認しただけで8名の男性が毎年1回から数回にわたりチベットに出かけて商取引を行なっている。彼らはバター、チーズなどの乳製品やゾモ（ヤクとウシの1代雑種のメス）をチベットで販売し、羊毛、チ

ベット茶、塩、タバコなどを購入してくる。最近では靴や陶製の食器、衣服などの中国製品を仕入れている。通常取り引きには貨幣が用いられる。国境からチベット側にわずかに下った地点に税関のポストがあり、交易人はその付近で換金するそうである。

交易人たちの多くは通常グンサからナンゴ・ラを越えてヤングマ・コーラに入り、そのまま川を遡って標高5,600m以上もある峠を越えてチベットに入る（図2参照）。グンサから国境まで5日間かかる、という。ヤングマ・コーラを下ってタムール川本流に出てオランチュン・ゴーラを経由する交易路もあり、国境までの日数は変わらないそ

表2 各家庭の生計活動

家庭	農耕	牧畜	観光	交易	カーペット	その他
1	○	○	—	—	—	—
2	○	○	—	—	○	—
3	○	○	—	—	○	—
4	○	—	—	—	—	—
5	○	○	—	—	○	—
6	○	—	—	—	○	—
7	—	—	—	—	○	—
8	—	—	—	—	○	—
9	○	○	○	—	—	—
10	○	○	○	○	—	—
11	○	○	—	—	—	—
12	○	○	—	○	○	—
13	?	?	?	?	?	?
14	○	○	—	—	○	—
15	○	○	○	—	○	—
16	○	○	—	—	○	—
17	○	○	—	○	○	—
18	○	○	—	—	○	—
19	○	○	○	—	○	—
20	○	○	—	—	○	—
21	○	○	○	—	○	—
22	○	○	○	○	○	—
23	○	○	○	○	○	—
24	○	○	—	—	—	○：ラマ
25	○	○	—	○	—	—
26	○	○	—	—	○	—
27	○	○	—	○	○	—
28	○	○	—	—	○	—
29	○	○	—	—	—	—
30	○	○	○	—	○	—
31	○	○	○	○	○	○：ラマ

数字は表1の家庭番号と共通。○：有、—：無

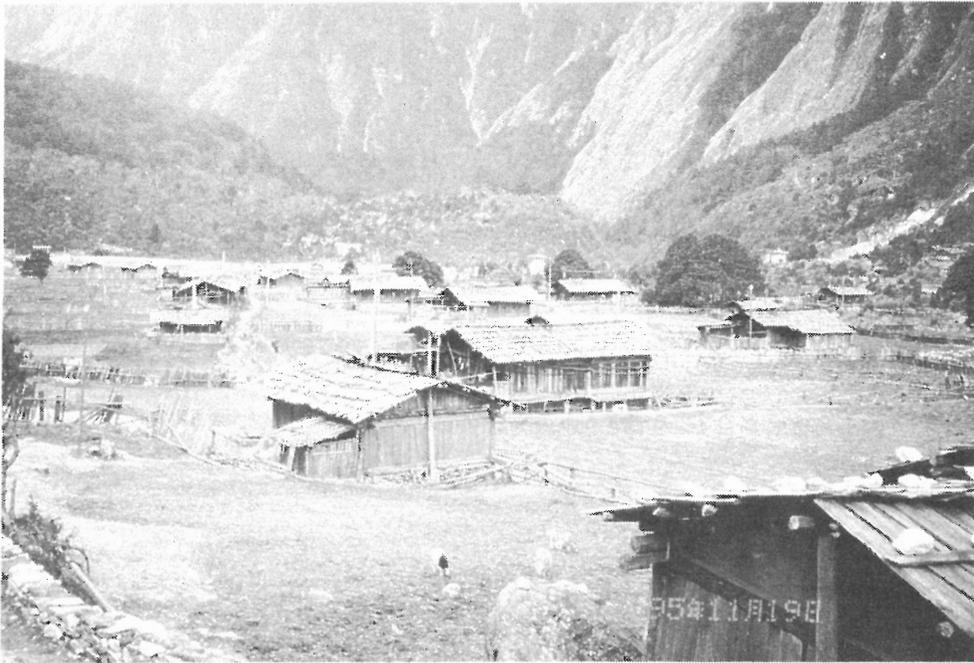


写真1 グンサ村の風景

うだが、グンサの人びとはヤングマ経由のルート
を好むようである。前述のように、タムール川上
流域の集落の中でもオランチュン・ゴーラは交易
に特化した村であり、村内を通過する交易路の通
行が制限されているのかもしれない。

近年まで外国人の入域が制限されていたため
であろうが、ガイド、ポーターなどの職に就く人の
数は少なく、現在でも機会は限られている。今回
私がグンサで確認したところ、ポーター、キッ
チンボーイなどの経験者は9名にすぎなかった。ト
レッカーを対象にした宿泊施設（ロッジ）は、数
年前に営業を始めた1軒だけである。敷地を幕営
地として開放し幕営料を徴収する家が数戸見られ
た。自らが所有するヤクを、登山隊、トレッカー
の装備運搬のために貸し出す例もあった。しかし、
全般的にグンサ住民はクンプ・シェルパと比較
して外国人、トレッキング産業との経済的な関わり
が希薄である。今後はヒマラヤ・トレッキングの
一般化に伴ってこの地域への入域者が一層増加
すると思われるが、他のトレッキング対象地域（エ

ベレスト、アンナプルナなど）に比べてアプロ
チに時間がかかりタムール川流域に旅行者の受け
入れ施設（ロッジ、バッチェなど）の数がまだ十
分とは言えないことから、直ちにクンプのような
状況にはならないだろう。

3) 住民のクラン (thar)

グンサ住民のほとんどはシェルパを名乗り、名
前を訊ねると「○○○シェルパ」というように答
える。私は、聞き取り調査の中で必ず世帯主夫婦
（寡婦も含む）のクラン名 (thar) を質問するこ
とにした。その結果をオピッツ (1974) やフュー
ラー・ハイメンドルフらの研究 (前掲) さらに古川
ら (古川, 1990; 月原・古川, 1991など) のナム
チェにおける調査結果と比較しようと考えたから
である。本稿ではタムール川上流域でシェルパを
名乗る人々を仮にタムール・シェルパと呼ぶこと
にしたい。シェルパのクランは父系をたどると同
一の祖先を共有する人々の集団で、同じクラン内
部での婚姻が認められない外婚的な単位である。

私が聞き取った限りでは、クラン相互の間に優劣関係はなく、胞族、半族のように組織化され特定のクラン相互の婚姻が制限されることはない。すなわち、すべてのクランは同等な関係にある、という。今回の調査では、上述の研究者たちが述べるように、シェルパ社会に参入した年代によってクランを整理・識別することは出来なかった。表1にグンサで記録した世帯主夫婦の出生地とクラン名を示す。

表1に示す通り、33組の夫婦からの聞き取りで17のシェルパ・クランを記録した。この中でnawa, salaka, minyakpa, lamaは上述の諸文献にも見

出すことが出来るが、その他のクラン名は記されていない。シェルパ社会には20あまりのクランがある、といわれているが、タムール・シェルパのクランを加えるとその数は大幅に増える。前述のように、グンサ住民の先祖はソル、クンプ地域にシェルパが入ったのと同じ頃（18世紀の半ば）タムール川上流域に移住してきたが、まずオランチュン・ゴーラに落ち着いた後グンサ、レレップなどの地点に派生した、という。彼らの伝承によれば、チベットからの経路はソル、クンプ・シェルパと異なり、タムール川源頭のティプタ・ラを越えてきた。彼らが現在まで伝えているクラン名は、



写真2 カーペット製作

彼らの故郷であるチベットの地名または村落名が反映している可能性もあろう。

3 シェルパ、ボテシア研究の傾向

本節では、私の手許にある文献を基に、シェルパなどヒマラヤ南面の高地民族が従来どのように捉えられてきたのか概観してみたい。

フューラー・ハイメンドルフの名著『The Sherpas of Nepal』(1964)によれば、シェルパ族はソル、クンプ地方を中心に居住する民族で、集落周辺では農耕(ジャガイモ、ソバ、オオムギ栽培など)および牧畜(ヤク、ウシ、ヤクとウシの雑種、ヤギ、ヒツジなど)活動に従事するが、チベット高地とインド、ネパール低地との接点にある地の利を生かし、両地域の産物を交易人として運搬することによって多くの利益を上げてきた。

1960年頃からヒマラヤ登山隊のガイド、コックや高所ポーターとして活躍することによって声価が高まり、1970年代からはヒマラヤ・トレッキングのツアー・コンダクターとしてネパールのトレッキング産業には不可欠の存在になっている。エベレスト山麓トレッキングのメッカであるクンプ地域の村落では、ロッジのオーナーになりトレッカーを迎え入れて利益を得ている人も数多い。トレッキング産業の定着に伴って起きたヒマラヤ地域の環境問題や社会変化については、本誌上でも既に論じられてきた(古川、1990; 1991; 1992; 河合、1990; 1992; 月原、1990; 1992)。

ただし、私が前稿(1993)に指摘した通り近年ヒマラヤ・トレッキングの大衆化が進んだのに伴い、ガイドやコックといった職にシェルパ以外の民族が進出する傾向が強まってきた。現に、今回私が行なったタムール川流域のトレッキングにおいても、ガイドを務めてくれたK君はタマンに属するのであった。

シェルパなどヒマラヤ高地民族の調査研究史上フューラー・ハイメンドルフが果たした役割は非常に大きい。彼に続く研究者たちは皆シェルパの居住地をソル、クンプなどネパール中東部の山岳地帯に限定し、それ以外の高地民族を一括して「ボテシア」と呼びシェルパとは区別している(Bista 1967, Fisher 1990, Brower 1991など)。「ボテシア」という呼称は、カトマンズ盆地やネパール

中山間地の住民たちが言語、衣服などの点でチベット系の特徴を保持する高地民族に言及する際に用いられる。オピッツは1965年にソル、クンプ地域で現地調査を行ない、シェルパのクラン名を記録してシェルパ民族の形成に関する貴重な業績を上げた(Oppitz, 1974)。彼は、タマン、グルン、ネワールなどシェルパ以外の民族の人がシェルパと通婚し、文化的にシェルパと同化して「シェルパ」と名乗ることがある、と述べている。しかし彼がカバーした地域はソル、クンプ地域に限られていた。カトマンズで手に入れた観光客向けの雑誌(Amatyya, 1993)によれば、オランチュン・ゴーラやグンサは「ボテシアの村」とされている。京都大学学士山岳会のヤルン・カン登山隊員としてタムール川流域に入り登頂者にもなった上田豊は、登山隊がポーターとして雇ったオランチュン・ゴーラの住民を「チベット人」と記している(上田、1979)。その一方、最近発売されたトレッキングの案内書(中村、内田、1995)は「アムジラッサ、グンサはシェルパ族の村だ」と述べる。

フューラー・ハイメンドルフ(前掲)は、ネパール高地の各地に居住する「ボテシア」と「シェルパ」は文化的に区別するのは困難だと述べ、強いて区別するとすれば「シェルパは道徳をわきまえ信頼するに足り、魅力的な性格を持つ点が他地域のチベット系民族と異なる」などと極めて差別的に記述している。人類学者は往々にして自らの調査対象(民族)を鼻屑目に語るもののである。彼はその後出版した『Himalayan Traders』(1975)の中で、東ネパールのタムール川とアルン川上流域に住む諸民族の交易活動について述べているが、いずれも「ボテシア」とされている。この記述は、1957年に短期間行なった現地調査を基にしたものである。彼はこのように「ボテシア」と「シェルパ」を区別しているが、『Sherpa Transformed』(1984)の中ではソル、クンプのシェルパと他地域の高地民族の同質性について言及している。すなわち両者ともチベットの出自で父系外婚的クランが認識されており、また社会内部にカーストを持たないこと、などである。現在に到るまで「シェルパ」と「ボテシア」はきわめて曖昧に分類されてきた、と言わざるを得ない。

このように、これまで「ボテシア」、「シェルパ」

両者の民族史、社会構造は十分に比較研究されないままに、「シェルパ族」はソル、クンプを中心にしてネパール東部からインド、西ベンガル州のダージリンにかけてのヒマラヤ南面高地に居住するチベット系の民族である、とされてきた（鹿野、1987）。研究者の間では、ソル・クンプのチベット系住民だけを「シェルパ」だと見なす暗黙の了解があるかのようだ。ソル、クンプ地域以外に居住するシェルパについては、クンプに隣接するロールワリン地域で集中的な調査研究が行なわれたにすぎない（鹿野、1979）。鹿野によれば、ロールワリンではクンプからの移住者を中心に比較的近年になって集落が作られた。したがって、ロールワリン・シェルパはクンプのシェルパと文化的な背景が共通する、という。だが、私がタムール川流域で出会ったタムール・シェルパは、前節で述べたようにチベットからネパールに入り込んだ経路がソル・クンプシェルパとは明らかに異なる。グンサでは、ソル、クンプ・シェルパの人々がかつてこの流域に移住してきた、という伝承は聞くことが出来なかった。K君によれば、アルン川上流域の住民も近年は「シェルパ」を名乗っているそうである。これまでネパール各地で「ポティア」と呼ばれてきたチベット系の民族が申し合わせたかのように「シェルパ」を名乗る現象が見られるのだ。「シェルパ」という名前は、固有の民族名というより「東方の民」を示す一般名として個人名に付加されているような印象を受ける。言語をはじめとする多くのチベットの文化要素を共有する人間集団が、出自や移動経路の違いを越えて一様に「シェルパ」という民族名を採用するようになったのは何故だろうか。彼らが「シェルパ」を名乗る根拠はどこにあり、それに何らかのメリットがあるのだろうか。私には、我々がこれまでいじめてきた「シェルパ」観を再考する必要があるように思われる。

4 課題と展望

最後に、今回の調査で析出した調査課題を指摘し、今後集中して行なうべき現地調査に向けての方向を示したい。大きく分けて2つの研究テーマが挙げられる。

まず、グンサ・コーラのような袋小路に居を構

える山地民族の生活を医学的、遺伝学的に解明することである。表1に示した通り、聞き取り調査の結果、祖父・父がともにグンサで生まれ育った男性が多く、彼らの多くはグンサで生まれ育った女性と結婚して家庭を築いているのである。すなわち、2～3代にわたってグンサに住む住民が多く、村内婚が多いのである（45.5%）。前述（2参照）のように、彼らがオランチュン・ゴーラからグンサ・コーラに移入して来たのはせいぜい100年前のことであろうが、村内婚が多いのはグンサ村民が土地への定着を進める過程で生じた現象なのかも知れない。

今回行なった住民への聞き取りは精度が粗く、私は今回の調査だけでタムール・シェルパのすべてが語れるとは思わない。しかし、人口がわずかに150人足らずのグンサでこれだけ村内婚が多ければ、その中に近親間の結婚が全くないとはいえない。現在のような状況が何世代にもわたって続けば、人々の間に遺伝的な身体障害などが生起する恐れが高まるのではなからうか。実際に、私は調査中に村内で4名（男：1、女：3）の耳が不自由な人に会った。グンサのような地理的条件にある村落で住民の間に身体的障害が多く表れることは、他にチベット、ヨーロッパなどでも報告されている、という（月原、私信）。今後は住民個々のライフ・ヒストリーをより詳細に調査し、人々の実際の婚姻行動と身体との関わりを明らかにしていきたい。

2番目は住民のエスニシティについてである。前節（3）に疑問を呈したように、近年になって住民は何故「シェルパ」と名乗るようになったのだろうか。この問題については、グンサだけに止まらずオランチュン・ゴーラ、ヤングマ、レレップ、ルントウン、といったタムール川流域にある集落の住民たちも含めて調査研究を進める必要がある。ただ、オランチュン・ゴーラ、ヤングマは現在トレッキング域としてネパール政府から認められておらず、原則として外国人の入域は禁じられている。我々が入域するためには特別の許可が必要である。前述（2）のように、フューラー・ハイメンドルフらが現地調査を行なったのは1957、1958年のことであり、それ以来この地域の高地住民は「ポティア」または「チベタン」と

呼ばれ続けていた。それがここ10年くらいの間に「シェルパ」を名乗り始めたのである。この地域の諸集落で調査を進めれば、変化の過程を追跡することは可能であろう。調査の中で「シェルパ」という名称が人々にとってのもつ意味を明らかにし、ヒマラヤ山脈の南斜面に住む高地住民の民族性についての理解を深めることが出来るだろう。

5 おわりに

谷間の村グンサにやっと陽の光が射し始めるのは午前10時過ぎだ。日が陰るのも早い。朝の気温は零下10度かそれ以下になるだろう。下流域の村に比べて人々が動き始めるのも少し遅くなるようだ。しかし、各家の主婦たちは6時過ぎ頃から家の前のテラスでジャクシンの枝 (*Juniperus recurva*: dhupi) を焚き、その香りが村中にたちこめる。私たちは毎朝ロッジの囲炉裏端に蹲り、サブニーが出してくれるスチャ (チベット茶) を啜るのだった。

一見したところグンサ村は明るさに乏しいヒマラヤの寒村にすぎないが、私には村で起こった出来事の数々がなつかしくよみがえってくる。そこには彼ら特有の打算があったのかも知れないが、私たちが訪れると村人は皆暖かくもてなしてくれたのだ。訪れた家庭のほとんどで、チャ、チャンなどを振る舞われた。ゆで卵、ジャガイモなどをすすめられることもあり、おかげで私たちは常に満腹の状態に聞き取り調査に回るようになった。また、足の傷口を消毒して包帯を巻いてやった老婆が「仏の加護がありますように」と言って涙を流しながらいつまでも私の手を握りしめていたこともあった。

人々が冬季間フォレで過ごすとはいえ、グンサは集落の戸数と範囲がコンパクトにまとまり、地域の環境に根ざした自給性の強い生活が営まれてきた。私は、人類学・社会学さらに医学・農学的な調査研究の優れたフィールドとして、ここを強く推めたい。カトマンズからグンサまでの長いアプローチにはヘリコプターをチャーターするなどの対策を立てればよい。調査許可、資金などの問題を解決し、タムール川の上流域を対象にした文化人類学、医学およびその他の学問分野を含む総合的な調査研究の実現を切に望みながら筆を置く

ことにしたい。

文献

- 1) 上田豊 (1979) 『残照のヤルン・カン』中央公論社。
- 2) Amatyya, J. (1993) Taplejung-Walangchung Gola, The Land of the Kanchenjunga. Adventure Nepal Vol.3 No.6. Kathmandu.
- 3) Bista, D.B. (1967) People of Nepal. Ratna Pustak Bhandar, Kathmandu.
- 4) Brower, B. (1991) Sherpa of Khumbu-People, Livestock, and Landscape. Oxford University Press.
- 5) City Net group of Architext Software (1995), Ethnologue Database.
- 6) Fisher, J.F. (1990) Sherpas-Reflections on Change in Himalayan Nepal. University of California.
- 7) von Furer-Haimendorf, C (1964) The Sherpas of Nepal: Buddhist Highlanders. Oxford Book, Calcutta.
- 8) --- (1975) Himalayan Traders. John Murray, London.
- 9) --- (1994) The Sherpas Transformed: Social Change in a Buddhist Society of Nepal. Sterling Publishers, New Delhi.
- 10) 古川彰 (1990) 「ヒマラヤ高地住民の環境認識研究ノート」ヒマラヤ学誌 第1号、京都大学ヒマラヤ研究会。
- 11) --- (1991) 「サガルマタ国立公園の成立と住民の環境問題—ヒマラヤ高地住民の環境認識ノート」ヒマラヤ学誌 第2号、京都大学ヒマラヤ研究会。
- 12) --- (1992) 「援助調査プロジェクトと住民の環境問題—ヒマラヤ高地住民の環境認識ノート」ヒマラヤ学誌 第3号、京都大学ヒマラヤ研究会。
- 13) 今井一郎 (1993) 『世界の遺産』地域の自然と人—ネパール・クンプと白神山地の暮らし—ヒマラヤ学誌 第4号、京都大学ヒマラヤ研究会。
- 14) 鹿野勝彦 (1979) 「ロールワリン・シェルパの経済と社会」『リトルワールド研究報告第3号』、人間博物館リトルワールド。
- 15) --- (1987) 「シェルパ Sherpa」『文化人類学事典』、弘文堂。
- 16) 河合明宣 (1990) 「ヒマラヤ高地村落研究の方法—第一次予備調査基本データ—」ヒマラヤ学誌 第1号、京都大学ヒマラヤ研究会。
- 17) --- (1992) 「シェルパ村落経済の変容」ヒマラヤ学誌 第3号、京都大学ヒマラヤ研究会。
- 18) 中村 昌之、内田良平 (1995) 『ネパール・ヒマラヤトレッキング案内』山と溪谷社。
- 19) Oppitz, M. (1974) Myth and Facts: Reconsidering Some Data Concerning the Clan History of the Sherpa. in von Furer-Haimendorf, C. (ed.) Contributions to the Anthropology of Nepal. Aris & Phillips.
- 20) 月原敏博 (1990)、「観光・交易の村における農耕と牧畜—ナムチェ村研究ノートから」ヒマラヤ学誌 第

- 1号、京都大学ヒマラヤ研究会。
- 21)月原敏博（1992）「チベット人の歴史的移動・定着に関する若干の考察：ソル・クンプとブータンの観察から」ヒマラヤ学誌 第3号、京都大学ヒマラヤ研究会。
- 22)月原敏博、古川彰（1991）「クンプ、ティンリー両地方の生業空間編成—家畜種構成からみた伝統と変容—」ヒマラヤ学誌 第2号、京都大学ヒマラヤ研究会。